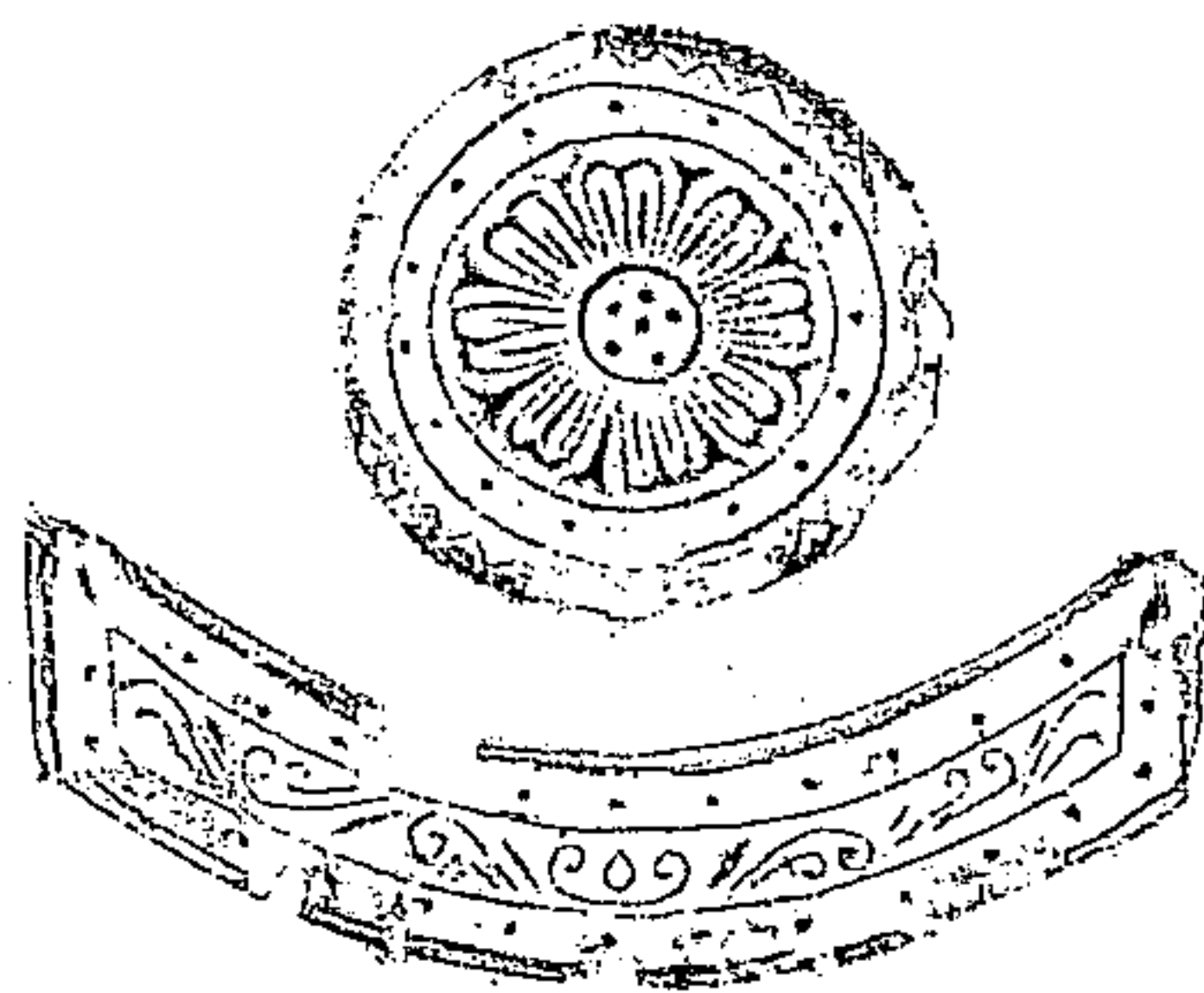


東広島市西条町吉行字伽藍

史跡安芸国分寺跡遺跡見学会

資 料



安芸国分寺跡出土軒丸・軒平瓦

1998年12月12日

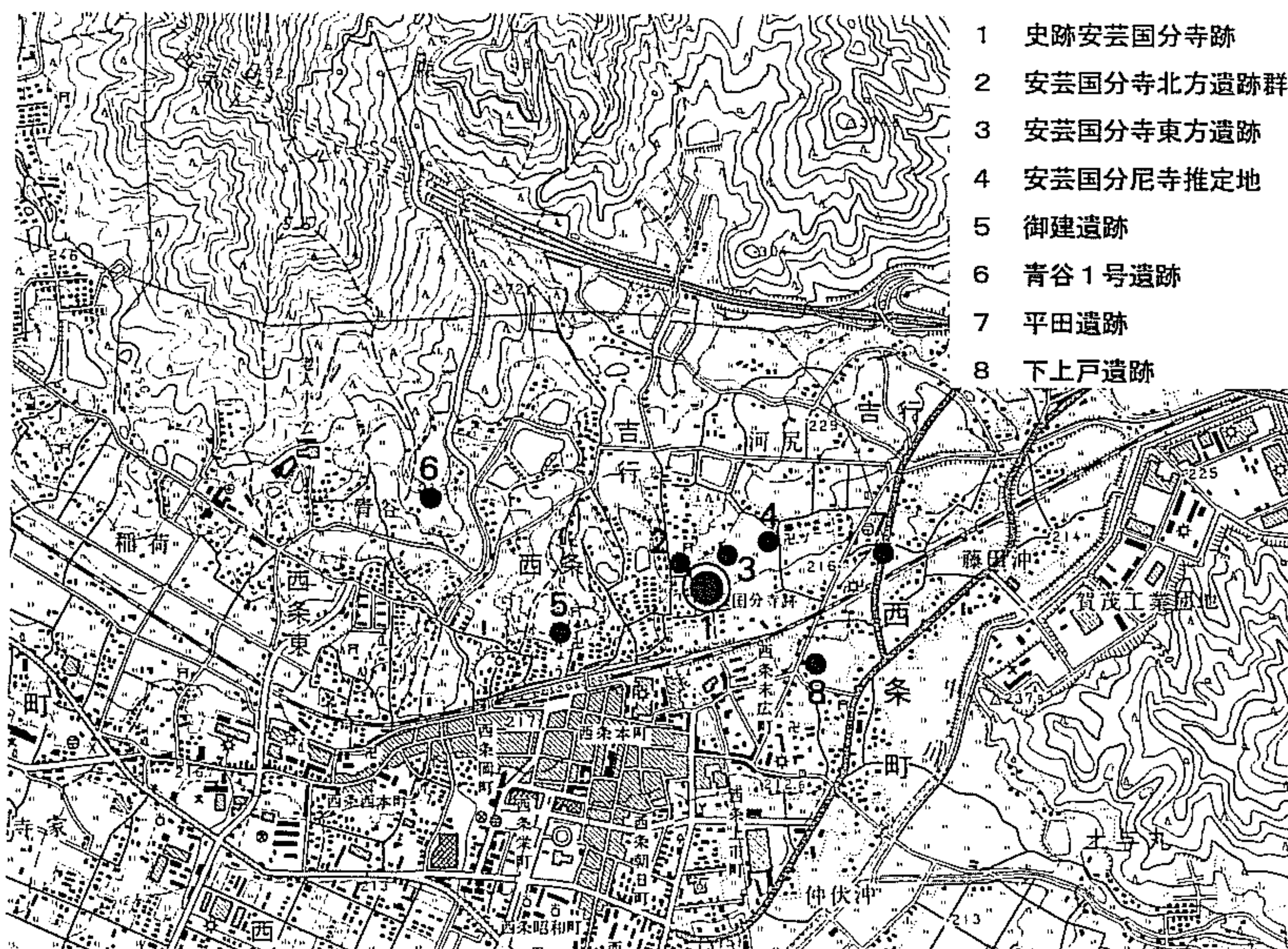
財団法人東広島市教育文化振興事業団
東 広 島 市 教 育 委 員 会

はじめに

国分寺の歴史

史跡安芸国分寺跡は東広島市西条町大字吉行字伽藍に所在しており、西条盆地の中央部からやや北側に位置しています。国分寺は奈良時代に国家の命令によって一ヶ国づつに造られた古代寺院で、古代史上の大きな出来事のひとつです。その歴史は天平13年（741）年2月、聖武天皇によって全国60余ヶ国にその造営の詔が出されたことによって始まります。国分寺は“国の乱れをしずめまもる（鎮護）”ことを目的としており、僧寺と尼寺がありました。一般的に「国分寺」と呼ばれる僧寺は正式には「金光明四天王護国寺」といわれ、みなさんがお立ちのこの場所が、安芸国における僧寺の中心部分（金堂）と考えられています。

しかし、国分寺造営の詔は出されたものの経済的・技術的な事情からその多くは、聖武天皇がなくなった後に完成を見ており、安芸国分寺も天平勝宝8年（756）年ごろに創建されたと考えられています。その後、平安時代前半ごろまで寺は順調に経営されていたと見られ、周辺地域にはこの時代の遺跡が点在しています。その後の国分寺がどのような変遷を経て近世に至ったのか明らかではありませんが、室町時代ごろに最も衰退し、その後、幾たびかの再興をへて現国分寺に引き継がれています。

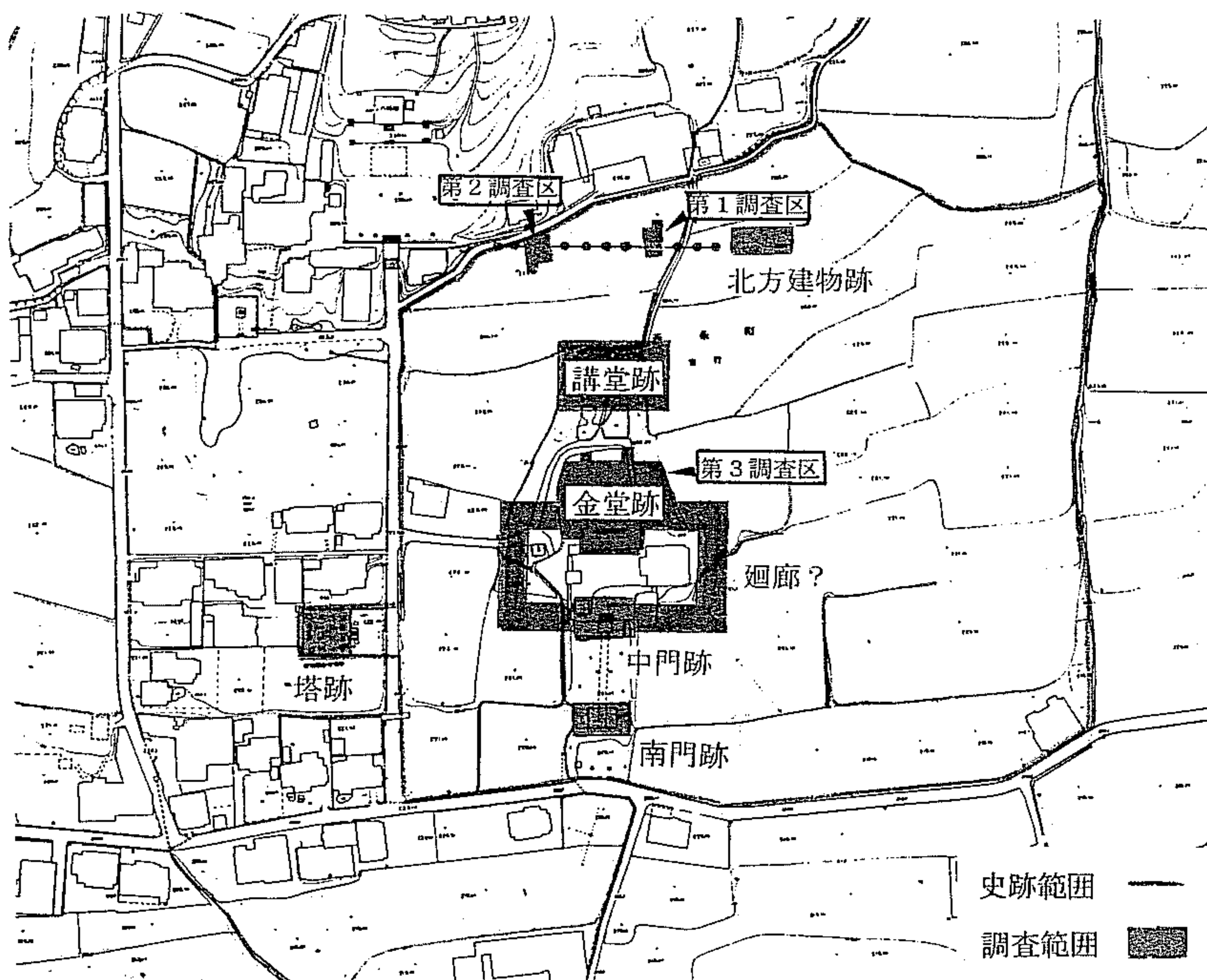


史跡安芸国分寺跡位置図（1：25,000）

これまでの調査と今回の調査について

安芸国分寺跡に初めて調査のメスがはいったのは昭和4年（1929）の広島県教育委員会の調査からです。その後、同教育委員会によって昭和44年（1969）から昭和46年（1971）まで実施された発掘調査で講堂・金堂・中門・南大門と考えられる建物跡のおよその位置や規模が明らかになりました。そして昭和52年（1977）、寺跡が史跡指定を受けたことにより東広島市教育委員会では安芸国分寺跡を史跡公園として整備するため、開発事業のたびに周辺地域の発掘調査を実施してきました。

今回の発掘調査は推定金堂部分（第3調査区）をほぼ全面的に調査することによってそこに存在する建物跡の規模・構造を明らかにするとともに、寺の北側の区画施設（第1・2調査区）を明らかにすることを目的として、平成10年10月1日から実施しています。



平成10年度 史跡安芸国分寺跡 発掘調査位置図（1：2,000）

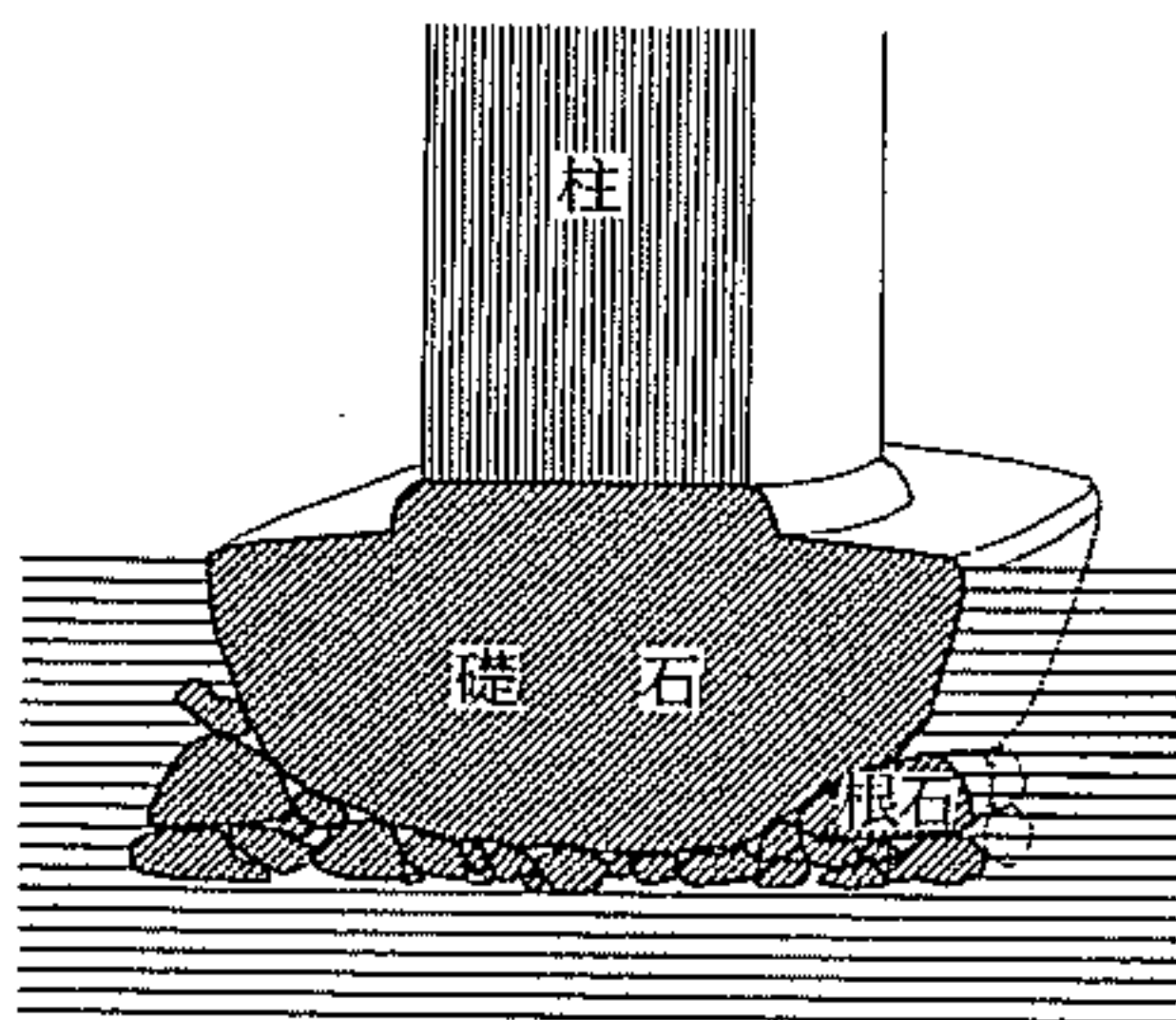
調査の成果

今回の発掘調査の成果を見学順に概説して行きます。

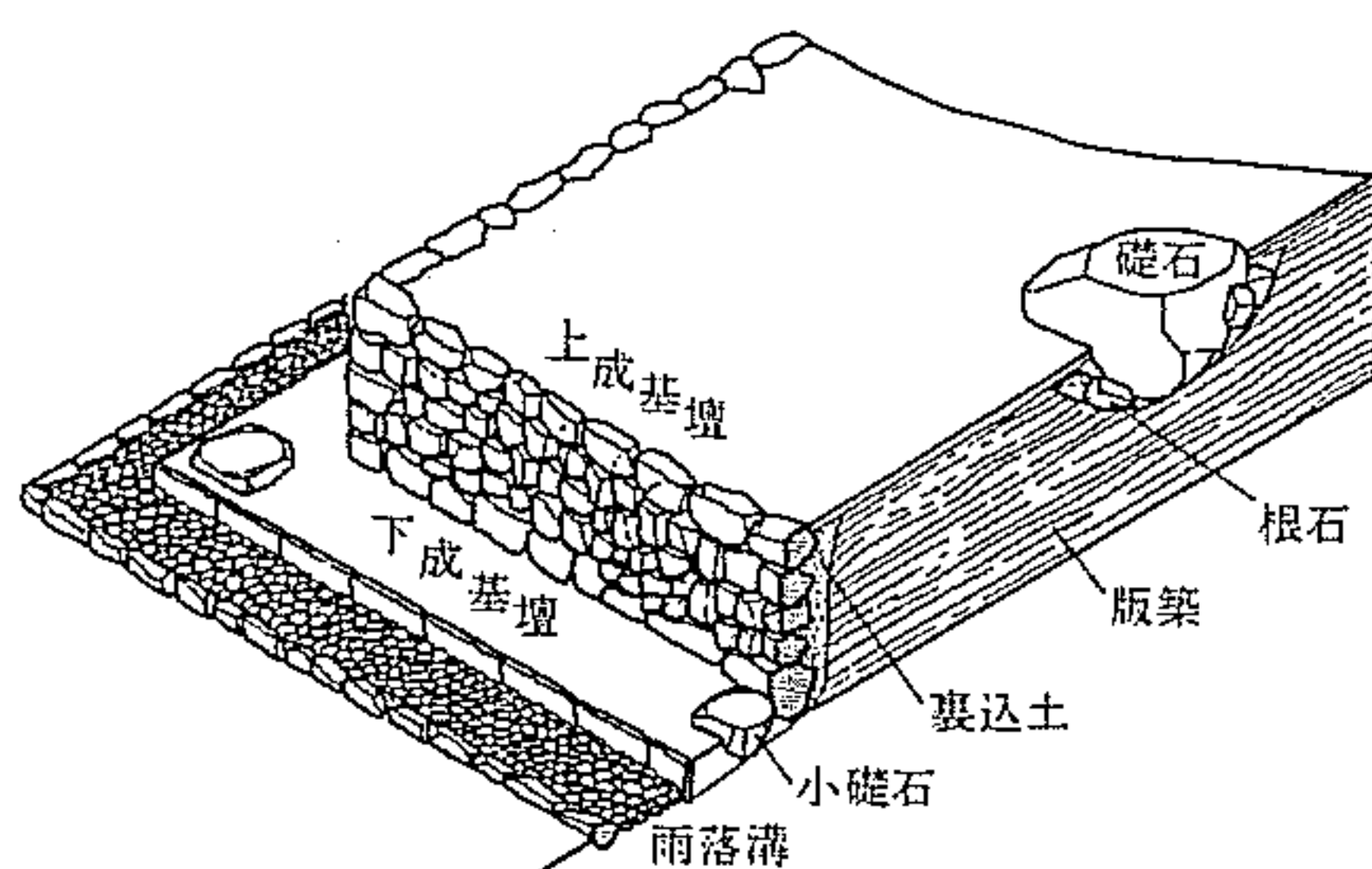
第3調査区（推定金堂跡）

今回の発掘調査でみなさんが最も関心を持たれているのは、推定金堂跡でどのような建物跡が見つかったのか、ということではないでしょうか。調査の結果、金堂跡と推定される場所は、後世に大きく地形が変化しており、まちがいに金堂であることを示す痕跡は見つかりませんでした。しかし、調査区南側で柱を立てた礎石が沈まないように詰めた根石が4カ所見つけました。このほかに、東側で屋根から落ちる雨水を流したと考えられる溝（雨落ち溝）と西側で建物基礎である基壇の表面を覆っていた化粧石が抜き取られた穴、北側で基壇の名残と見られる高まりなどが見つけました。また、東側では基壇を築いた際に土を突き固めた痕跡（版築）も見つけました。

以上のことから、この場所にはかなり大きな建物の基壇が存在していたと見られ、その大きさは東西約25m、南北約20m以上と推定されます。調査区からはこのほかに近世の池と溝が見つかっています。

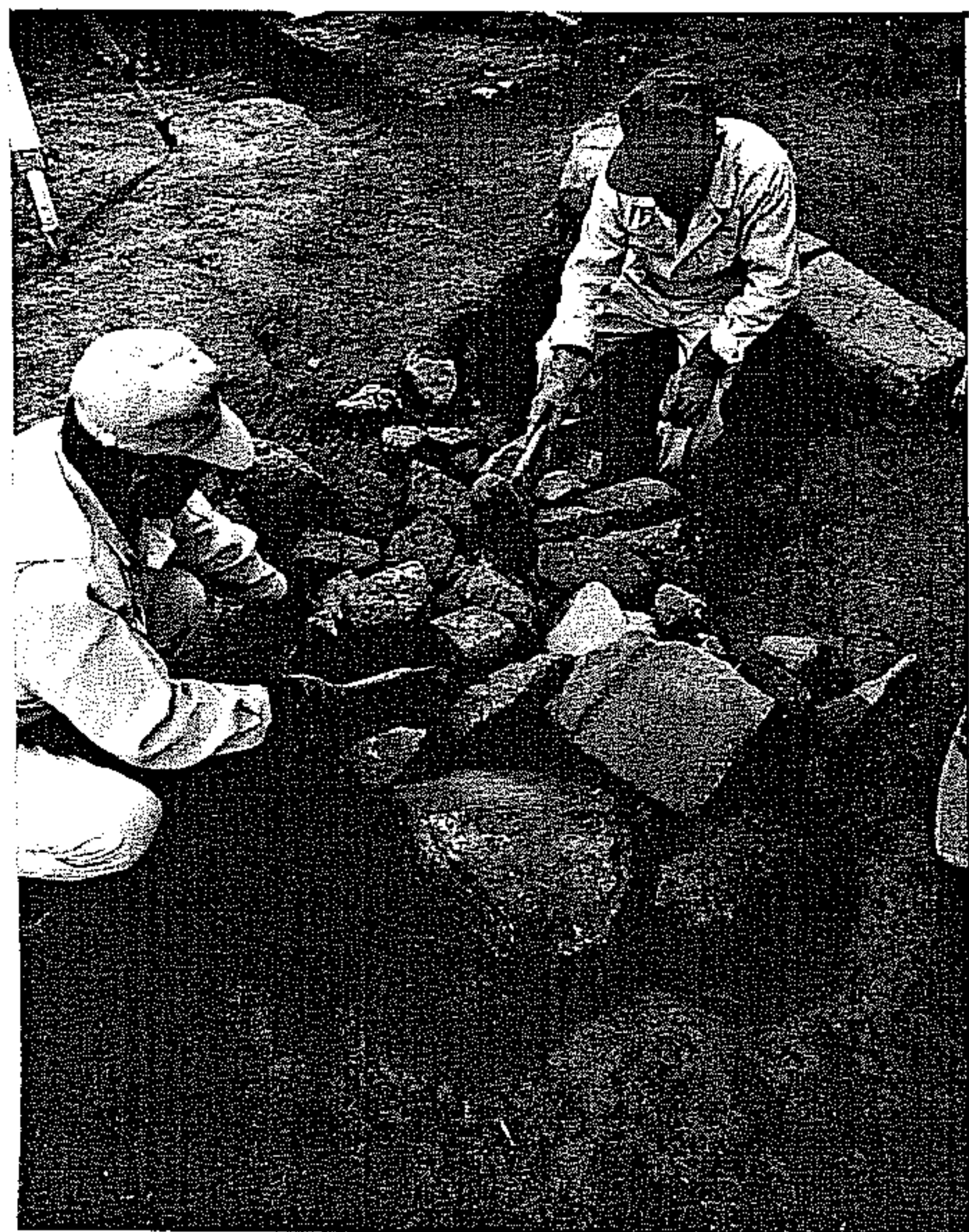


礎石模式図



乱石積重成基壇

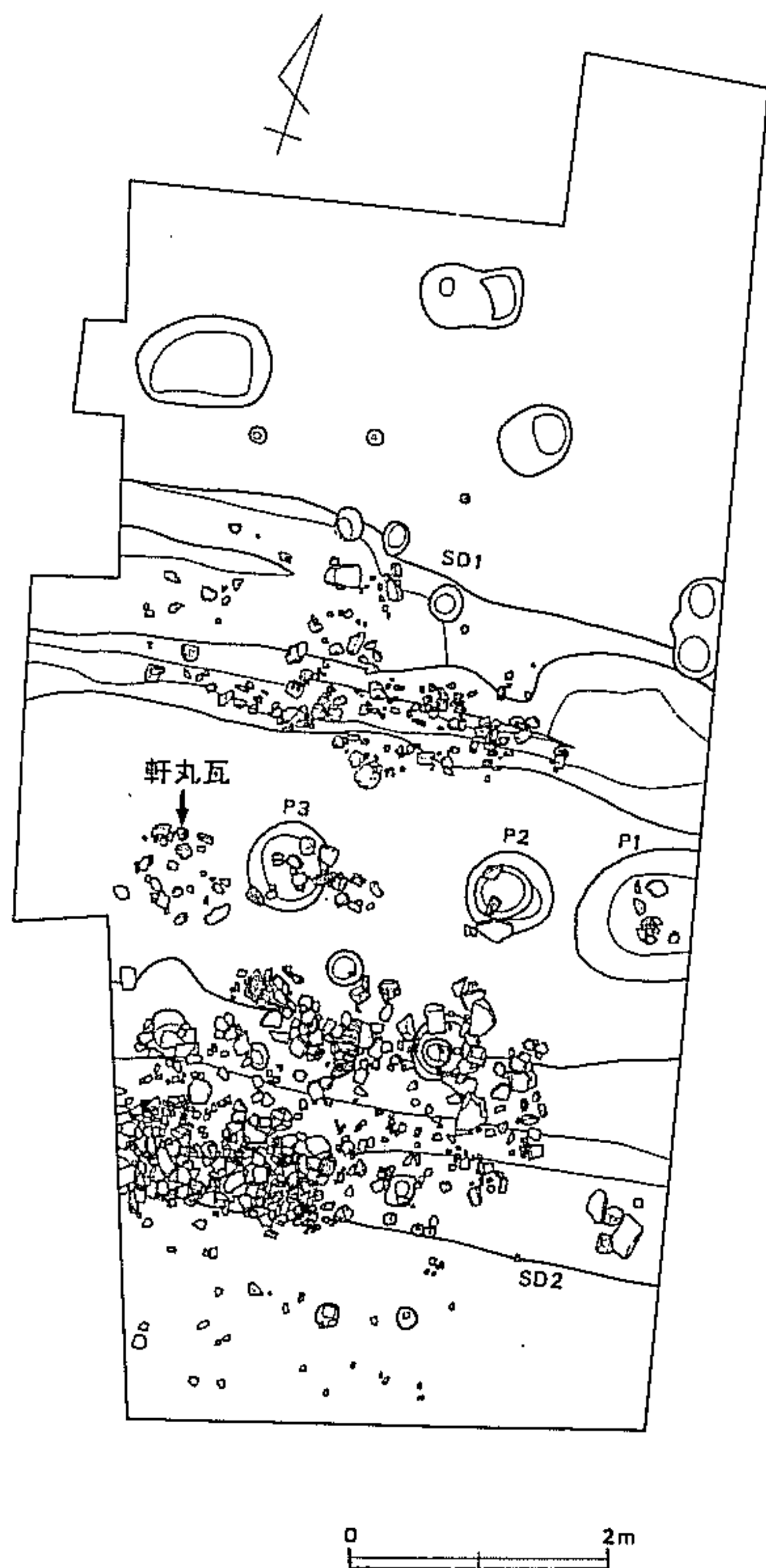
基壇模式図



第3調査区で見つかった根石

第1調査区

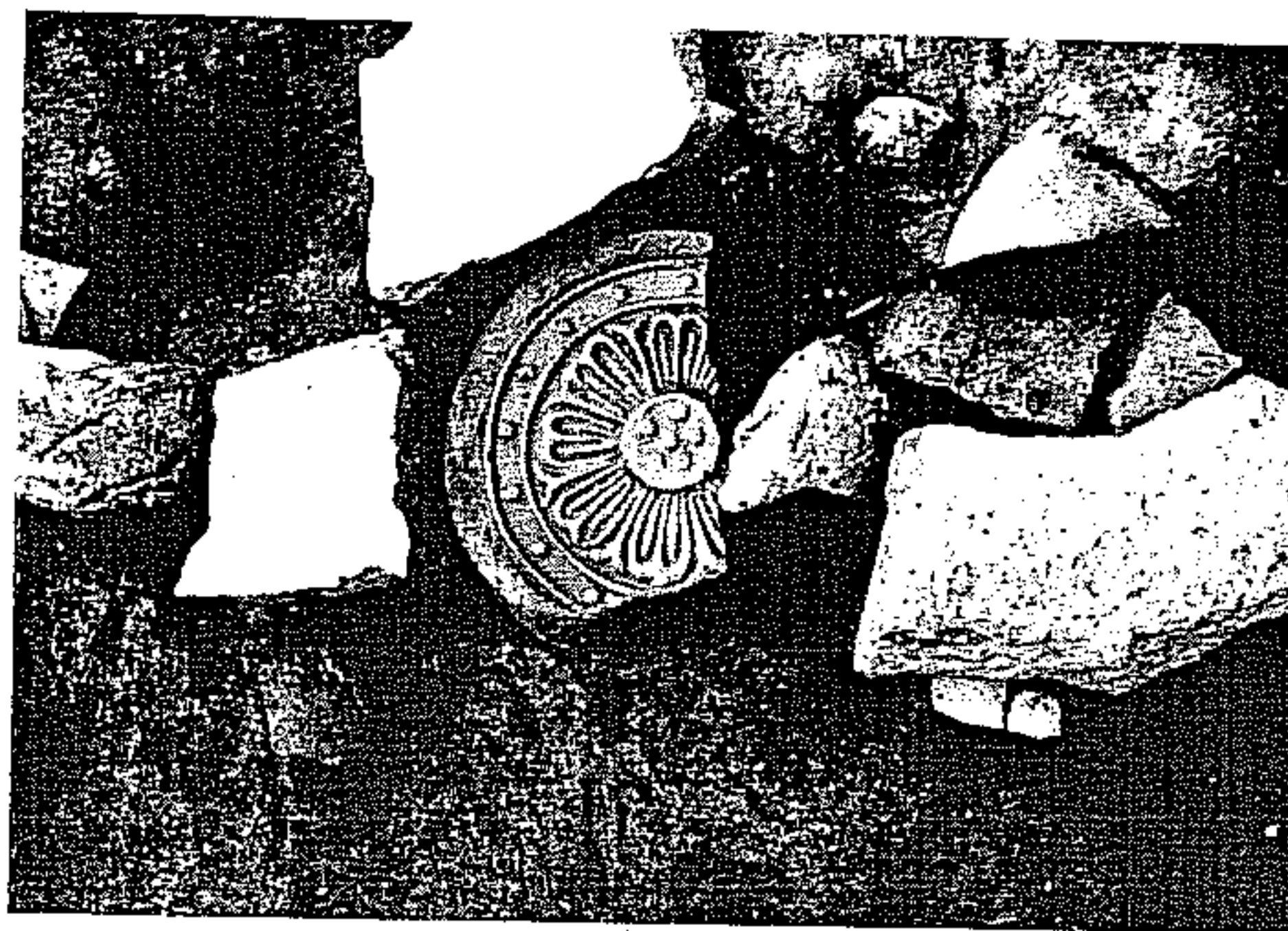
第1調査区は推定金堂跡の北東約70mに位置しています。見つかった溝SD1・2、柱穴^{はしらあな}P2・3はいずれも西側がやや北上がりがりになっています。SD1は幅約0.5m、深さ0.3m、SD2は幅約1.5m、深さ約0.5mを測ります。SD1には須恵器^{すえき}などの土器類、SD2からは多量の瓦が出土しました。2つの溝の間隔は約1.8～2mを測り、そこから見つかった柱穴には柱の痕跡がうかがえました。



第1調査区実測図（1：80）



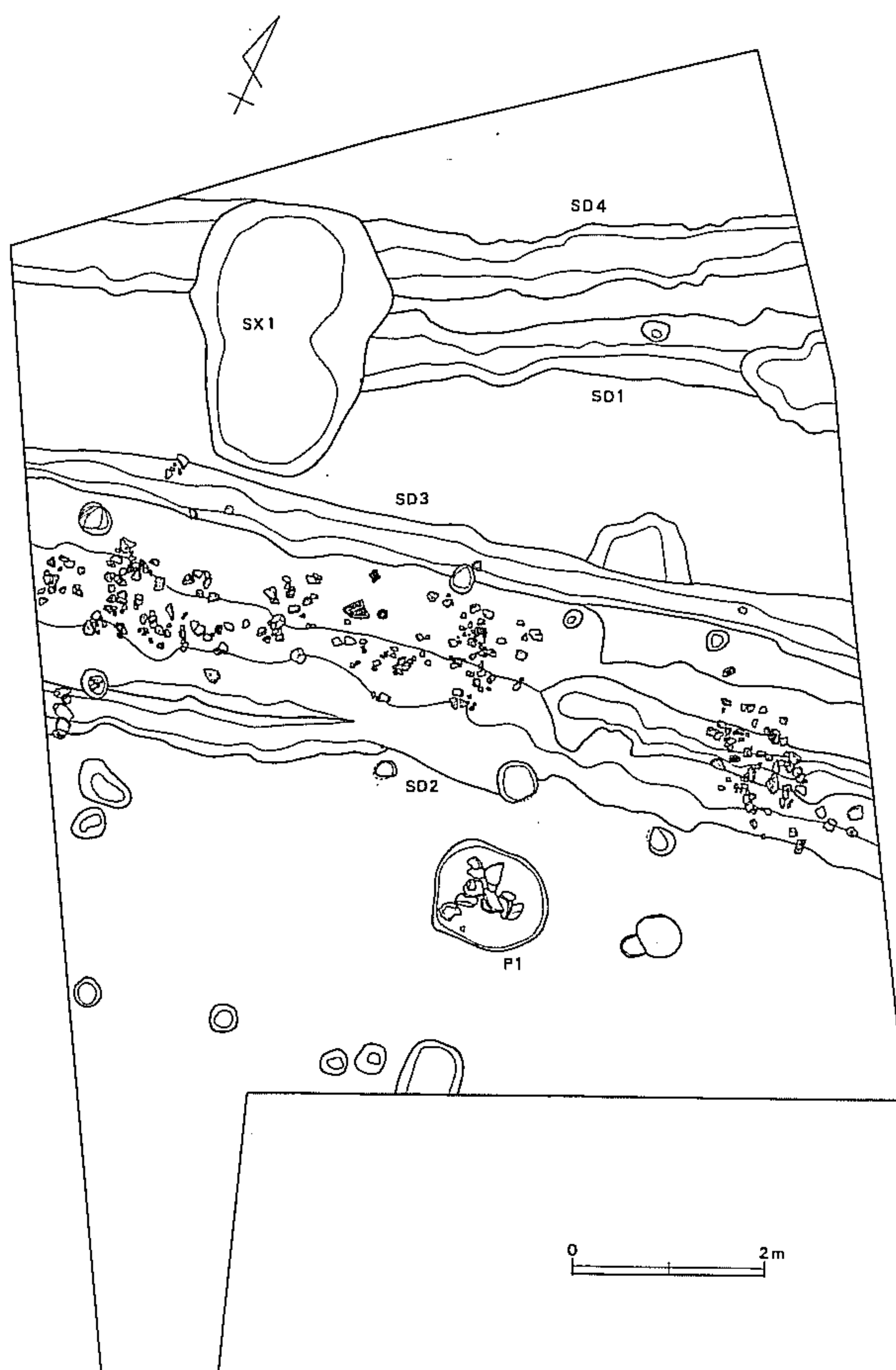
第1調査区の作業状況



複弁蓮華文軒丸瓦の出土状況

第2調査区

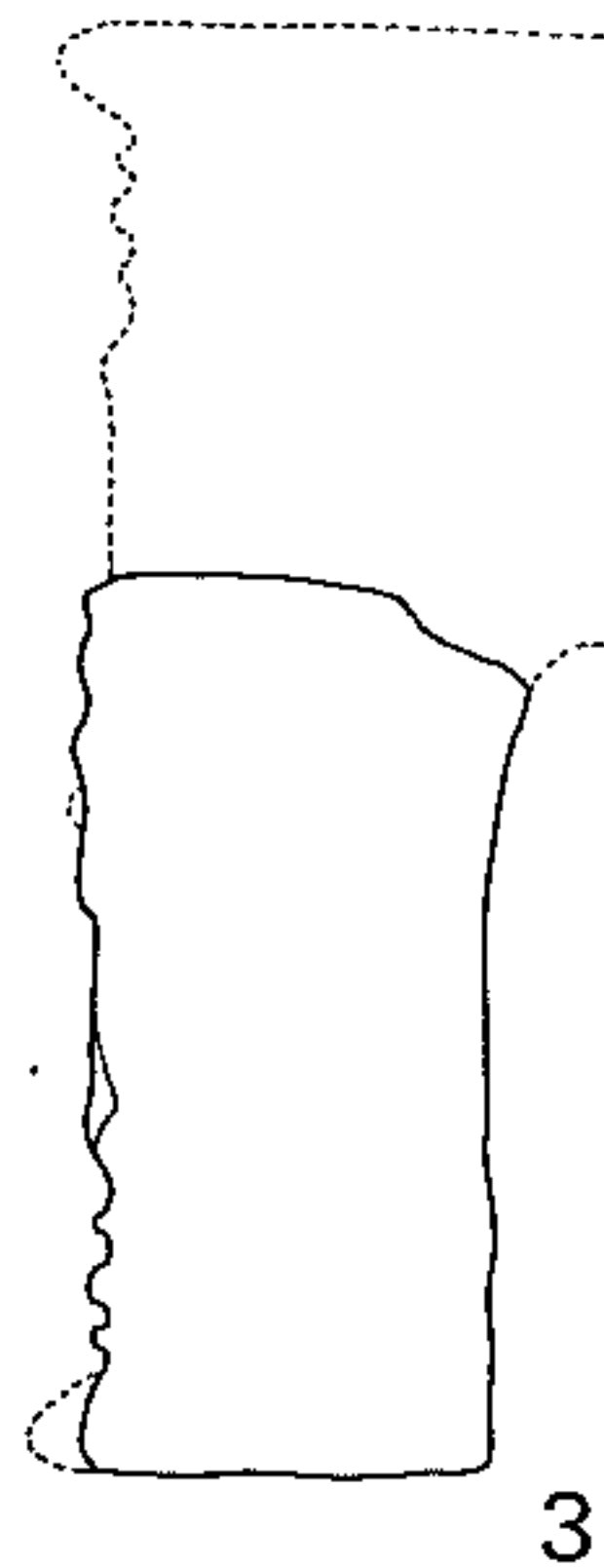
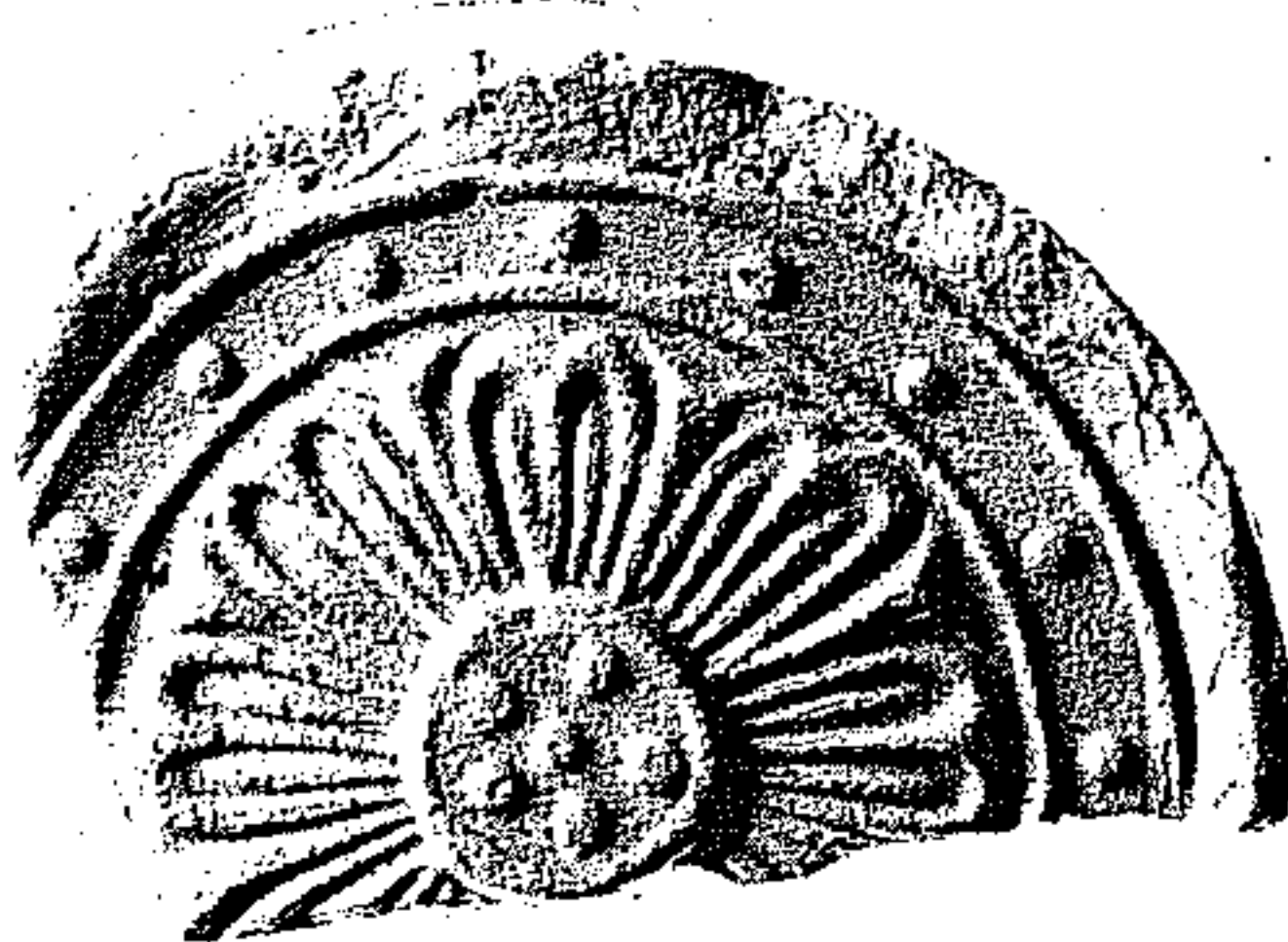
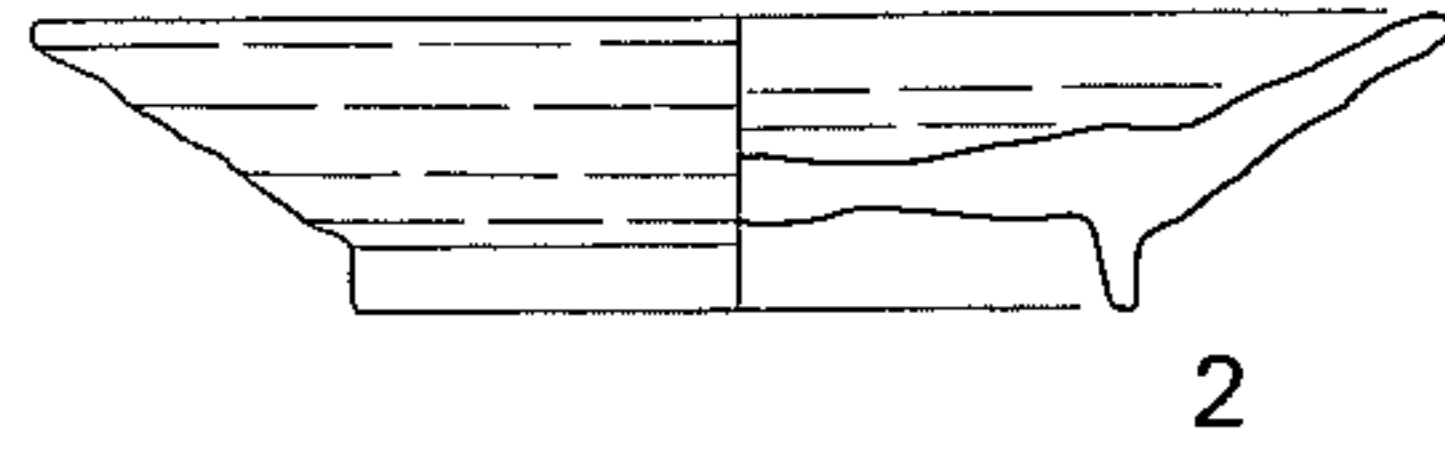
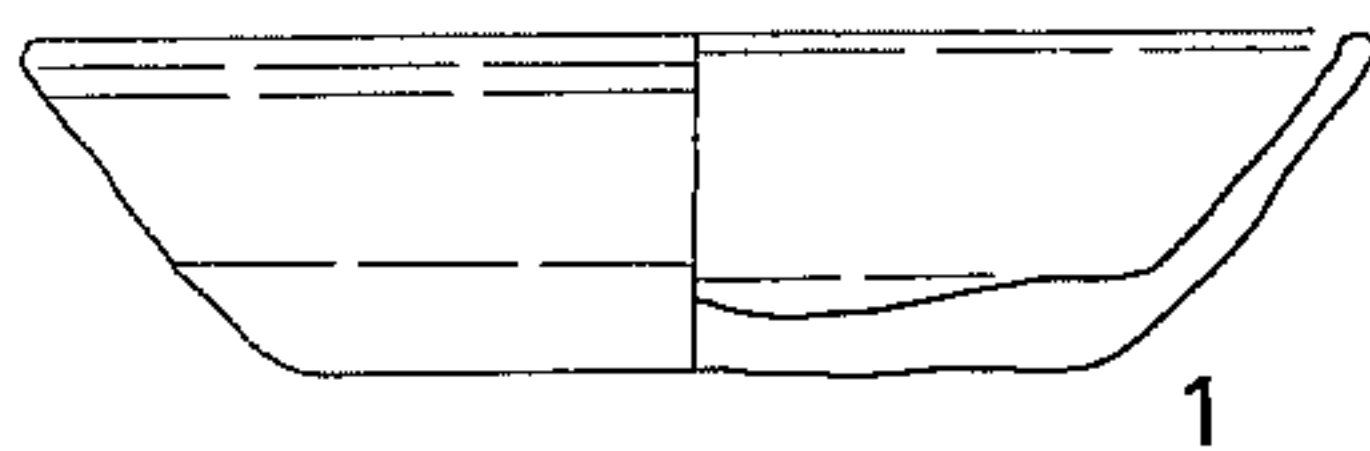
第2調査区は金堂跡の北西約70mに位置しています。見つかった溝のうちSD2とSD3は第1調査区と同じように西側がやや北上がりになっています。SD2は幅約2m、深さ約0.3m、SD3は幅0.5m、深さ0.2mを測ります。そしてSD2は第1調査区のSD2と方向や幅が一致することから両者はつながった1本の溝であると考えられます。またSD3は第1調査区のSD1とつながる可能性もありますが、SD2との間隔が狭いためさらに検討を必要とするでしょう。P1は根石のような石の集りが見られ、柱穴の可能性あります。



第2調査区実測図 (1 : 80)

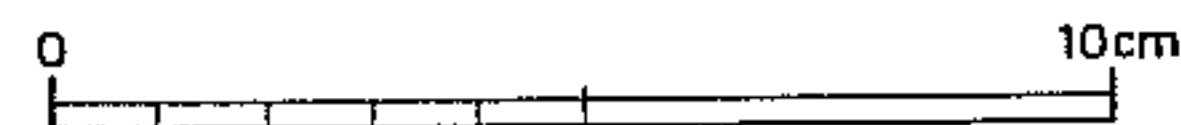
出土した遺物

第3調査区からは古代の瓦が、調査区の中央付近から小さな破片となって見つかりましたが、はっきりと形がうかがえるものはほとんどありませんでした。近世の溝や池からはこの時期の瓦が多数見つっています。第1・2調査区では古代の瓦が多く見つっており、第1調査区では複弁蓮華文ふくべんれんげもんとよばれる模様を持った軒丸瓦のきまるがわが、第2調査区からは無文の軒丸瓦むぶんが出土しました。瓦に次いで多く見つかったのは須恵器すえきの杯・皿などで、この他には土師器杯はじきつき、緑釉陶器りよくゆうとうきなどが出土しています。これらの土器は9世紀の初めから中頃のものと見られます。



第1調査区出土遺物実測図（1：2）

- 1 須恵器杯
- 2 須恵器皿
- 3 複弁蓮華文軒丸瓦



まとめ

さて、第3調査区でみつかった基壇きだんや礎石そせきの根石ねいしははたして奈良時代の安芸国分寺金堂のものなののでしょうか。現在までに“そうだ”と断言できる発見はなされていません。しかし、推定される建物基壇たてものきだんの規模が東西約25m、南北約20m以上というかなりの大きさであること、その後の国分寺の歴史を考えた場合、この基壇が奈良時代の安芸国分寺金堂のものである可能性は十分にあるでしょう。

また第1・第2調査区で見つかったSD2をはじめとする溝は、寺の北側を区画する施設であったと考えられ、柱穴を使ってあるいは何らかの施設が造られていた可能性があります。

